
とある科学の重力領域<G-フォース>

目黒 良輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の重力領域 > G - フォース <

【NZコード】

N7005X

【作者名】

田黒 良輝

【あらすじ】

無能力者の少年・上条当麻がインデックスと出会い魔術の世界へ向かっていく中、学園都市では新たなる陰謀、策略が渦巻く。この世に存在しない素粒子『重力子』シーケレットプランを生成、操作する能力を持つアレイスター計画の隠密候補のレベル5・重力領域(G - フォース)は上層部の命令に従い猛威を奮っていた。重力領域の物語が始まる。

序章 始まり（前書き）

連載初投稿です。
宜しくお願いします。

序章 始まり

学園都市にしては広大な土地が存在する。その土地の真ん中には全体が白に染められた建物がぽつりと建っていた。

第3能力開発施設。

この施設では学園都市に来た子供が、能力者の素質があるかないかを調べるためにある。

そして今日も能力開発を行う子供が来た。とある少年もその中にいる。

「僕は強い能力者になるんだ!!」

少年は白衣を着た女性を見ながら言った。
女性は少年の姉である。

「強くなるのはいいけど喧嘩はして欲しくないなあー」

姉は機会仕掛けのベッドに寝ている少年に向かって。

「喧嘩はしないよー、お姉ちゃんを打つんだよーーー。」

楽しみだわ、と姉。

「そろそろ始めるわ」

男の声が聞こえて、慌てて少年に脳波を計るための機械を頭に装着されちゃう。

「じゃあね

笑顔でどこかに行く姉の姿は、忘れられなかつた。

この後の出来事で、本当にさよならをすることになるとは知らずに……。数時間が経つた頃、施設に耳障りな警報音が鳴り響く。

「一号機から五号機に異常が発生しました！」

研究員が叫ぶ。

「脳波に上がが起っています！－危険ですよ！」

「心拍数が上がつてます！－危険ですよ！」

「これ以上は無理です」

次々に発生する事態に研究員のリーダーは

「 続けます 」

冷たい一言だった。しかし、それに異議を唱える者がいる。

「 それじゃあの子達はどうなるんですかー 」

少年の姉は抗議をしたが中止こよひとなつてしない。

その時の少年は変な夢を見ていた。

何もない闇の空間。

少年は孤独だった。

頭が痛い。

（お姉ちゃん助けて…）

頭痛の中で少年は光を見た

そして少年は無意識に光に向かって腕を伸ばす。ピー――――――！

研究施設に無情にも、残酷な音が響いた。

能力開発の失敗。

男女合わせて五人の子供の死亡が確認された。

少年の姉は自らの無念に、泣いている。

「子供の遺体はアンチスキルに連絡をして引き取つてもうう

研究員のリーダーはまるで何事もなかつたかのように呟いた。しかし、その直後だった。

ピー、ピー、ピー

絶望に満ちた空間に再び音が鳴り響いた。

「き……奇跡です、一人の少年が生きています！」

一人の研究員が動搖の声を漏らすと、他の研究員達がざわめき始めた。そして

第3能力開発施設は謎の爆発を起こした。

アンチスキルが到着した時には施設の形じこらか、残骸すらなかつた。

幸いにも広い土地のおかげで、被害は施設だけで済む。

それから十年後。

少年は生きていた。

シークレットプラン
隠密候補として。

序章 始まり（後書き）

序章です。

次は第1話です。

第01章 重力領域（G・フォース）（前書き）

第1話です。

引き続き宜しくお願ひします。

第0-1章 重力領域（G・フォース）

学園都市

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人（その8割は学生）。最高権力者は統括理事長のアレイスター・クロウリー。

あらゆる教育機関・研究機関の集合体であり、必要な生産・商業施設や各種インフラも都市内に完備されている自己完結した都市。最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の中長期格差が存在する。主な電力源は風力発電なのか、都市の各所には大きな風車がいくつも取り付けられている。都市はそれぞれ特色のある2-3の学区から構成されており、それぞれの学区で独自の条例が、都市の法律とは別に制定されている。

建前では日本の一都市であるが、実際には統括理事長および統括理事会が行政・立法・司法の全てを独自に運営し、その実態は独立国家に相当する。学園都市第四学区

少年は、この第四学区に密かに暮らしている。

現在は「ゾンビ一袋を片手にぶら下げて夜道を歩いていた。車も人もいなく、音が一切として消え去った静かな夜。

学園都市のルールでは、高校生以下の学生は六時までしか外で遊んではいけないというのがある。しかし、少年はそのルールを平気で破り無断で外出をしていた。

「よお、坊主」

突然、前方から男が声をかけてきた。

「……」

少年が無言で突つ立つてると、徐々に人の数が増えていき、最終的に8人の男達が剣崎を囲んでいた。

「財布を貸してくれない？」

唐突としてコーダーらしい男が言つてへる。

「あ、あ？」

「いいからサイフをよこせつ……」

少年に男が言うと果物ナイフをポケットから取り出し、振りかざす。急な展開だ。

けれど、少年が驚く事はなかつた。ひらり、と簡単に向かつて来るナイフを持つ手を避け、両手でその手を掴む。

「…？」

男が驚くのも束の間、少年は男の手をあらぬ方向にねじ曲げた。

「手があ、手がああああーー！」

男は余りの痛さに絶叫する。

「！」のヤロオオオオーー！」

続いて後ろから一人目の男の拳が飛んでくる。少年は拳を横へ受け流し、男の腹に向かつて肘を叩き込む。

「ぐあつーー！」

二人目の男は体勢を崩して地面に倒れた。

「！」いつつーー！」

今度は前方にいた三人目の男の手の平から小さな火球が放たれた。

その瞬間、少年の手に黒く輝く光が集結し、木刀のような形を作つて、炎を横嵐にする。

そして鋭い眼差しで少年が男へ駆け出した。

「来るなつ！」

再び炎を何発か発射し、少年に対して攻撃をするが全て避けられしまい。

少年は男の懷に入ると左手で男の鳩尾を殴る。

「ぐがああーー！」

三人目の男は地面に倒れ伏せた。

残る不良共は五人。

「これじゃあ埒が明かねえな」

少年がつまらなそうに言つと、残りの五人に向かつて右手を突き出す。

すると、手の平に黒い光が集まり始めた。コンマ数秒の時間経て、球状の黒球が造られた。

「く、来るぞ……」

男達が攻撃に備える。が、黒球は破裂した。そして、黒球の破裂した衝撃が生み出され、道を抉りながら男達に迫つていった。「う、うわあああああ！」

静かな夜の第四学区に爆発音と数人の男の悲鳴が鳴り響く。道は悲惨な状態だった。

数十メートルに渡つてえぐられた地面。男たちが倒れていて中には口から泡を出してズボンが濡れている奴もいた。

「任務以外で人を殺すとめんどくせえんだ。手間かけんじゃねえ三下が」

「「「め、めんなさあああああい……」」

男達は逃げるようになにか立ちはだかる。少年はハアとため息をつきながら

「最近よく絡まれるな。昔はよく襲撃にあつたのに

ビール袋を揺らしながら男達と逆の方向へ歩きだす。

少年の姿は薬品で色落ちしてしまつた白髪の少し前髪が長いショートカットに獲物を狙う獣のような鋭い眼光に紅色の瞳。

近くに来ても学園都市最強の超能力者に間違われる程の容姿をしている少年は爽やかな夜風を浴びながら自宅へ足を運んでいく。

第01章 重力領域（G・フォース）（後書き）

戦闘シーンを入れてみました。
次をお楽しみ下さい。

第02章 隠密候補（シークレットプラン）（前書き）

今日は会話回です。

第02章 隠密候補（シークレットプラン）

現在は朝の九時。

少年は私服に着替えてとある人物に電話をした。電話のコールが三回鳴った時に誰かが出た。

『お前から電話をするなんて珍しいなあ重力領域（G・フォース）』

電話に出たのは40代ぐらいの男の声。少年・重力領域（G・フォース）が電話をした先は統括理事会である。

『それで今日は何の用だ？』

男は重力領域に問う。

「ある人物について調べろ」

そう言いながら、重力領域は昨日もひつた名刺を見た。

『誰を調べるんだ?』

『益田 純吾と書つ奴だ』

電話から何かを書くよつた音がした。おそらくメモをしていく。

『お前にも用がある』

男は何かを思い出したみたいだった。

『統括理事会からの任務がある』

重力領域は無言で聞いた。『7月の下旬に騒ぎになつた幻想御手を
知つてゐるだろ?』

「聞いた奴の能力が一時的に上がる物だろ。だが、あれを聞いた奴
は昏睡状態になつちまつ」

『まあそんな所だ。それで、幻想御手を妹達に併用させた実験・絶
対能力者進化（レベル6シフト）実験を再び始める。重力領域、君
はその実験に参加してくれ』

いきなり唐突に言われた為言葉を失うが

「絶対能力者進化（レベル6シフト）実験つつのは学園都市最強
能力者の方通行が実験し凍結した実験だろ。何故今になつて始動
する?」

『理事長が第一候補の一方通行に絶望していくな。第一候補の垣根

スペアプラン

メインプラン

『帝督にしてもらつてもいいんだがそこまで興味を示さない。残るのは隠密候補の君しかいないんだ。今回の実験を成功すれば君は』

『絶対能力者（レベル6）になり学園都市最強の能力者となるぞ』

絶対能力者（レベル6）と学園都市最強の能力者といつ単語を聞いた重力領域はニヤリと笑い

「おもしれえ、参加してやる。それで何時から開始だ」

『9月3日から開始する。場所は第三学区にある原子力研究所だ。期待してるよ』

重力領域が切る前に切られる。携帯を折り畳み机に置きソファーにボフツと音をたてながら座る。

『これで姉さんの願いが叶う。待つてくれオレは必ず絶対能力者（レベル6）になって学園都市最強になってやる』今から十年前、

重力領域が第3能力研究施設を破壊する一週間前

「うひ、走っちゃダメでしょ……」

白衣を着た女性が走り回る男の子に注意する。注意された男の子こそ、能力をまだ得ていない重力領域（G・フォース）だ。

「1）めんなさいお姉ちゃん」

「分かればいいのよ。貴方は優しくて怠慢の弟なんだから」

白衣を着た女性・重力領域の姉は重力領域の頭を撫で微笑む。

「ねえ、どあすればお姉ちゃんを楽にする事が出来るのかなあ？」

「フフフ、この歳でそんな事を考えるなんて。いいのよ私が好きで

やつてる仕事なんだから

重力領域の姉は重力領域と同じ身長になつたように足を曲げ重力領域と同じ目線にし

「この学園都市はレベルが0～5まではしかないの。お姉ちゃんはねその上のレベル6の能力者を見てみたいの」

「じゃあ僕がレベル6になる……」

重力領域の姉は再び微笑むと

「頑張つてね。応援してるから」

「うん……」昔、重力領域の姉が言つていた「レベル6を見たい」という言葉は重力領域の頭の中に深く刻まれていた。

「それより、益田 純吾つつのは何だつたんだ？」

重力領域は改めて名刺を見る。これを渡されたのは昨日の夜、男達と別れてからだ。

男達と別れ公園で一息をついていると足音が徐々に近づいて来る。それに気付いた重力領域は足音の方へ目を向ける。そこには黒のスリーブを着てワックスでガチガチに固めたオールバックの男が見えた。

「初めまして重力領域（G・フォース）君」

「テメエは誰だ。そこの教師じゃねえよな統括理事会の関係者か？」

「初対面でタメ口とはいいで胸しますが、まあいいでしょう。何故、私が統括理事会の関係者だと？」

「オレの名前、存在は書庫や名簿にはねえんだよ。それなのにオレの名前を知つてるのは運営している統括理事会の関係者しかいねえんだよ」

「そこまでの推理力凄いですね。でも半分しか合つてしませんよ」

ハハハッと笑う男に舌打ちし手元の缶「コーヒーを持ち「コーヒーを口に含み飲み込む。

「では大ヒントをあげましょ。ヒントは」

「お姉さん可哀想ですね」

男が言葉を放つた瞬間、重力領域はその場から瞬時に黒い剣を生成し男の動脈めがけて斬りかかるが男は一步後ろに下がりギリギリで躰す。顔は未だに笑顔のままだ。

「テメエ何故それを……」

「お話をこれまでです。詳しく述べた余り田口」

男は重力領域に名刺を投げ渡すと虚空へと消えていった。

「チツ、空間移動系の能力者か」

近くにあつた椅子をガンッと蹴り飛ばし苛つきを静める。
静まつた所で男から渡された名刺を見る。そこには 益田 純吾と
かかれているだけだった。

「益田 純吾…… アイツは何故十年前の事を知つてやがる」

第02章 隠密候補（シークレットプラン）（後書き）

少し過去編を交えてみました。

次は実験開始です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7005x/>

とある科学の重力領域<G-フォース>
2011年10月19日19時07分発行